年　頭　所　感

理事長
髙 木　建

「建設（鉄骨）分野にオオカミ来(きた)るか?!　～今年を構造改革元年に～」

皆さん、明けましておめでとうございます。

我々を取り巻く昨年の需要環境は内需の過半を占める建設（建築・土木）はピーク比6割に充たない低迷で推移したものの、建産機が外需に支えられ順調に回復したことなどから全体としてはピーク比8割の水準まで持ち直すことが出来ました。
特に、建産機はリーマンショック後の落ち込みが激しかったものの、大幅な合理化等により能力削減を進めたことが奏功し、外需依存とはいえ現在高い操業レベルにまで回復したことは特筆されます。

では、今年はどうか。全体としては昨年並みの需要規模を維持できると期待を込めて見ていますが、問題は建設分野です。私が懸念していることを申し述べたいと思います。建設投資額が往事の半分である40兆円に縮小する中、鉄骨需要も2年連続で400万㌧前後と不振を極めており、今年もその水準に留まるものと予想されています。

この、3年に亘る停滞は明らかに景気の循環に因るものではなく生産年齢人口の減少等経済の構造変化に起因するもので、今後とも大幅な回復は望めないと見ざるを得ません。その一方で、鉄骨加工能力700万トンは依然として変わらず、業界は大幅な需給ギャップを抱えたまま今日に至っており、受注競争の激化と相まって加工マージンの急速な低下を招いているのが実態であります。

このように鉄骨を取り巻く我々シャー業界は受注減のみならず、需給ギャップと受注競争の激化の中でこれまで財務体力を消耗しながら何とか耐えてきたがそれも限度に来ていると関係者誰もが感じているところだと思います。
今年は建設関連分野で、いよいよ淘汰・再編の荒波が押し寄せる．．．。これが“狼少年”の杞憂で終わればいいがと思いつつ、そうした兆しが見え隠れし始めた今、建材系シャーの構造改革待ったなしの年となりそうな気配です。

そうは言いつつ、年初から景気の悪い話を縷々申し上げても始まらないし、需要家への供給責任がある以上我々は立ち止まることも許されません。400万㌧の鉄骨需要が消えて無くなるわけではない、そのマーケットで勝ち残り、事業を継続発展させるにはどうするか。
かねて、私は「量から質へ」「６割操業に耐えられる収益構造」に事業の枠組みを再構築することを申し上げてきました。
しかし、建設分野の特性として受注の山谷が激しく短納期、変更対応が常態化している中で供給責任を果たさねばならぬこと等を考えると、単純な縮小・合理化は現実問題として自ずと限界があることも事実です。
このため、付加価値を上げるなど需要の深掘り、加工基盤の整備あるいは事業分野・規模の見直し等の合理化・コスト改善など効率化と高付加価値化をキーに攻めと守り両面で従来より一歩も二歩も踏み込んだ自助努力による取り組みが必要かと思われます。

もうひとつの懸念事項は、適正加工賃が取れない、特に鉄骨切り板の収益水準が低下傾向にあることです。これはマーケットの縮小、需給ギャップの拡大に伴う競争激化が背景にあることは勿論ですが、直接的には短納期化、受注ロット・単重の低下に伴う加工能率（生産性）・歩留低下が進展していることに起因していると思われます。原料価格の高騰による鋼材価格の高止まりが予想される中で、こうした収益低下傾向が続くのかどうか実態を調査し、加工賃決定ルールの見直しを検討する必要があるかと考えています。

ご承知のとおり、現在「品質証明ガイドライン」の実行運用に向け、需要業界である鉄骨建設業協会と協議を進めていますが、あわせて従来必ずしも明確でなかった契約業務や仕様決定のプロセスについてもより公正で透明性あるルール作りと明確化を図りたいと考えています。このように個々の取引では解決できない課題について引き続き業界間の対話と連携で双方にメリットのある解決策を模索していく所存であります。

昨年来申し上げてきたように本年、当業界は生き残りをかけた厳しい環境に置かれていますが、力を合わせ将来への礎を築ける年にしたいと念じています。ご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（㈱ 富士鉄鋼センター 社長）

年 頭 ご 挨 拶

鉄鋼産業懇談会
厚板部会長　**守安　進**

皆様、新年明けましておめでとうございます。
平成２３年の年頭にあたりまして、ご挨拶申しあげます。

昨年を振り返りますと、国際金融危機の混乱が残る中、世界経済はアジアを中心とする新興国がいち早く立ち直りをみせる一方、国内では急激な円高の影響を受け、製造業の海外シフト、海外勢の競争力向上が鮮明となってきました。また国際情勢では万博の開催、ＧＤＰ世界第二位の経済大国となった中国の存在感が一段と際立った一年でもありました。

国内鉄鋼を取り巻く環境につきましては、粗鋼生産量が昨年１１月までで前年同期比１３ケ月連続の増加、年度見通しでは１億１千万トンと２００９年度の９、６００万トンからは回復に転じ、明るい兆しが見えてきています。しかしながらエコカー補助金の反動、円高の影響による輸出競争力の低下等を考えますと依然予断は許されない状況にあります。

厚板に目を転じますと造船、建設機械、産業機械分野等の需要は総じて堅調に推移しているものの、建設、店売り分野の需要は依然伸び悩んでおり、分野毎の２極化が一段と顕著になってきました。堅調な分野においても新興国の旺盛な需要に下支えられているという面が大きく、円高等の影響による製造業の海外移転、輸入鋼材の圧力等を考えますと、今後は決して楽観できるものではいと思います。

このような状況の中、鉄鋼メーカー、鉄鋼流通には以下のことが強く求められていると考えています。一つ目は従来の固定観念にとらわれず現状の作業の見直しを行い、更なる生産性の向上を追求すること。二つ目にはお客様が今何を最も要求しているかのニーズを察知するマーケティング力と、それに答える製造現場の技術力の追求。三つ目には、今までの枠組みにとらわれない経営の取り組み。本年はいかに技術力を磨いていき、従業員一人一人の力をいかに発揮させていくか、つまりは限られた資産をいかに最大限活かしていくかが重要なテーマになると考えています。また昨年に引き続き実需に見合った生産に徹することも重要だと考えます。まだまだやれることは多いと感じます。恐れずスピード感をもって取り組んでいくことが今後を切り開いていく鍵だと考えています。我々メーカーとしましても出来る限りの協力・支援をさせて頂く必要があると考えておりますので、何なりとご相談を頂き一体感をもって本年を乗り越えていければと存じます。

本年は兎年でもあり飛躍の年となりますように明るく前向きに進んでいきたいと思います。

最後になりましたが皆様方のご健康とご健勝を心より祈念致しまして私の新年の挨拶とさせて頂きます。

（JFEスチール㈱　常務執行役員）